
Afterimage

粒子分解

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A f t e r i m a g e

【Nコード】

N 0 8 4 6 K

【作者名】

粒子分解

【あらすじ】

あーあ、メンドくせー

日常を斜め目線で見える何処にでもいそうな普通な高校生、神薙 緋
炉。

だがそんな平和的な日常をぶち壊されてしまう

「ミーン！ターナー？」

NO' (前書き)

変人

NO、

「おいおい、日常でこんなやつであるのかよ!!?」

叫びだすのも無理がなかった、普段絶対目にするにないこんな「異常」、俺の「普通」をたった一言で「ソイツ」はぶち壊していた

「み……な?……!」

ああ……思い出したくもない

今から二時間前の事である↑

「あーあ詰まんねーの……ったく」

「そうだよな!! 神薙^{かななぎ}!!」

俺の名前は神薙 緋^{ひいろ}炉、なんでこんな中二病的センス名前を付けられているかは、俺じゃなくて俺の親に聞いてほしい。

髪は茶のかかった黒、瞳はぶー（殴り）と言わけは無く……何処にでもいる日本人の為、あったり前に黒、身長は168……誰に離してるかも解らないので自己紹介終了!

んで、今俺の独りごとにつ込んでくれたのは（いちいち）幼稚園からの幼馴染の「外崎 恭介」ひとざき きょうすけ、まあ略すなら「突っ込み過ぎの馬鹿」

本当になんでもかんでも「無駄」に突っ込んでくる若干小突きたくなるがもういい加減慣れてしまった。

「はいはい、いちいち突っ込んでるとm」

「そこ！！授業中です！！私語厳禁です！！」

・・・ほら、きた。こいつは絶対に食いかかると思ってた

この、「天使様」は我らが、K高校2年A組の担任、山田花子w（やまだはなこ25）

口癖「です」、略称「天使」（エンジェル）通称エンジェル可愛く「天使」（えんじえりゅう）ww

まあ、とにかくエンジェル、どう見ても場違いなほどに外見は「口リ」（美少女）
けど、この外崎みたいになんでもかんでも、突っかかってくるのは止めてほしい、

「いい加減、私語を慎むことを覚えてくださいです！！」

そして、このしつこさも

「はいはい、ごめんちゃいセンセ」

「あ、済みません、先生」

もちろん俺は後者の方だ

「先生を馬鹿にしないでください！！」

あーあ、こいつらメンド・・・。

あ、別にセンスのこと好きな訳じゃないんだからさっき言ってたこと忘れるよな！！？

「外崎君！、後で別室ね？」

「も、もしかして先生との禁断の午・・・」

ガン・・・

これ以上調子乗ると俺も巻き込まれそうだったので小突いてやった

「はは、わりわり」

「ホントだよ」

「じゃ、神薙君も、後で別室ね♪」

「はい、ホントすみませんねいつもいつもこいつは・・・え？僕もですか？」

俺は、気持ち良いはずの日差しも鬱陶しく思い、カーテンを閉めた

NO、1-1（前書き）

めんどーことはきらいなんだけどな

NO、1 - 1

うわーダル

おいおいまさかの俺も巻き込まれる・・・つくづくメンドクセーこいつら

「神薙くん、外崎くん！！いい加減に授業中は私語を慎みなさい！
！です——」

あのさ・・・さっきのって、HRほーむるーむじゃね？

「えー？先生流石のどじですねー」さっきのはHRですよ？？ww」

あ、やっぱり突っ込んだ、期待裏切らないよねー外崎は・・・またメンドクサイことを

ガン

当たり前前に突っ込んでやった・・・

と、思ったら外崎が避けやがった、何故だ

「せ、先生はドジじゃありません！！！」

あんたはドジだろ、・・・全く

「神薙くん、外崎くん、罰として国語の宿題倍です」

あーあ、なんでいつもこうなるんかねー？外崎氏ね！！

「えー先生ーマジで倍ですか？ちょっとそれは無理がありますー」

外崎、頼むからもう余計なことしないで・・・ね？花子が「3倍――」って続けるぞ？

「じゃあ、1・5倍ね？その代わり絶対にやらなかったら、3倍ね？」

マジか、そう思った時外崎がアイコンタクトをしてきた、こいつ、なんかやったな・・・

異様なまでにニヤニヤしてやがる、正直幼馴染を10年以上しているが・・・今でもこいつは読めない

「あ、ありがとうございます」

「サンキュ、センセ」

もちろん前者ね？

「はいはい、では、HRも終わったので、もう下校してくださいです」

「じゃ、先生じゃあね」

これは、二人同時だ、花子はこの軽めの挨拶が好きらしい・・・「授業だとかー私語おしゃしり」とかうるさいのに、挨拶だけは軽い。

「あ、あとカーテン開けといてです」

はいはい、と、てきとーに会話を済まして俺はカーテンに手を掛けた。

「なんかこの部分だけ影ができてんな、雲か？」

俺は、外崎に問いかけたつもりだったが

「あ、わり、俺今日さバイトなんだよね、んじゃあね」

すこらっささと。外崎は帰っていきやがった「あーあ、置いてけぼりかよっ」と俺は虚空に言葉を投げかけた（独りごと）

「ヒトリゴト、カワイソ」

「だろ？ほんと・・・散々巻き込んでおいてさ、謝りもしないんだよ・・・え？」

俺は、何処から聞こえたか解らない声に今頃驚いた（乗り突っ込み）

俺はきよろきよろ・・・

「ドコ、サガシテンダ？」

また声が、にしてもこもってるな・・・ふー影？

俺はカーテンを大きく開いた

「ミーン！ターナー？」

「うわぁ・・・!!!?」

俺は驚いた拍子で転んだ、どっかの漫画見てーに

そこには人(?)が浮いてやがった・・・浮い・・・てる、っていうか空中に立ってる?

「ナニ、オドロイテンノ?」

カタゴトだ・・・「ソイツ」

「な、なんで浮いてるんだ?」

俺は若干もつれてしまった脚をバタバタさせながら(冷や汗かきながら)

「ウイ、テル?。ウイ、テナイヨ?」

「ソイツ」は真っ黒な制服(せいふく)のボタンを一個はずしながら、至ってフツーに返してきた。よく見ると「ソイツ(制服もどき)」は浮いてはいなかった・・・うん。浮いては(・・・)いなかったね。まさかとは思ったけど・・・うん。ごめん聞くね?

「も、もしかして・・・」

「ソウ、ヒツカカッタ」

こういうのは・・・裏切ってほしいよね

NO、1 - 2 (前書き)

なんだ!?

「そいつ」は馬鹿か?

NO、1 - 2

俺は依然として、腰をジベタに座った(?) まま、呆然と「ソイツ(引っ掛かった奴)」を見上げていた

「あ、あの・・・大丈夫?」

「オマエ、ダイ、ジョウブニミエ、ルノカ?」

そ、そうですよねーうん。大丈夫には見えないよ。そりゃ

「タス、ケロヨ」

いやーそう言われてもね・・・ねえ?

「で、でもどうやって?」

普通は聞くだろ、どうなってるか分からないしそう思って続けた

「た、助けたいのは山々だけど、どういう風に引っ掛かってるか解らない・・・見える範囲でいい。教えてくれないか」

「カンガ、エロ」

えー?

無理無理、考えろって言われてもなー、

「シヨウガナイ、テヲカセ」

俺は、この「人話聞いてんのか!!?」っていう感情を抑えながら
ヨワヨワと立ち上がって、恐る恐る手を伸ばした

「39」

・・・さんきゅー?、サンキューか、つくづく解らねえなこいつ。
とかどう見ても届かないだろこれは・・・と、その時

ビュン

と、何か黒いものが俺の腕を掴んだ。「ソレ（黒いもの）」は俺を
宙へと浮かせ、止めた

「ジーマー、タファロメヤ」

俺はただ訳も分からず宙に浮いていて「イミフー」なのに

はたまた、「イミフー」な言語が使われたわ困り困りまくって、思
考回路が壊れる

「スマンナ、コイ、ツガマタカッテニ」

これ以上、混乱させないで。

「わぁ、わぁ」

俺は動転し過ぎて「日本語」話せなくなっていた

「ジョイカジーマータファア!!」

ドスン、という大きな音共に「ソイツ」が倒れこんできた

もう「どうやって？」と言う、疑問さえ俺の脳裏を掠めない

「あーあ痛つてー・・・」

にしても、見た目の割に重かった

顔を上げると、ソイツがてを差し伸ばしていた

「タテ」

はいはい、と。なんだか解らないが、動転していた心のパラメータが平衡に戻っていた

「オマ、エノコ、コロヲオチツ、カセトイタ」

「はい？」

何の超能力？けど、なぜか、気持ちには落ち着いている

「オマエ、ココカラニゲナイトアブナイ」

ドーン

隣の教室が割れた

そう、ガラスをたたき壊したときのように

そして、「ナニカ」が入ってきた

NO、1 - 2 (後書き)

なんか登場

NO、1 - 3 (前書き)

なんかきた

NO、1 - 3

ドスン、ドスン・・・という音は無く

なんか入っばいのが入ってきた・・・

「アレハ、アフ、ターイメージ」

また「イミフー」な言語？

「な、なんだよそれ」

「マア、ヒトヲシユシヨクトスル、コノヨイガイノ。」

はあ・・・この世以外のー、まあ、人を主食とする？・・・なんだ

「バケモノ？」

まさかの逆に聞かれる・・・

「ば、化け物なのか？」

「ヨクワカラナイ、ペットのバアイモアルシ。ドウグノトキモアル」

はあ・・・

「で、なんなんだ？」

「ドッペルゲンガー（第二の世界の住民）。ミンナソウヨンデル」

ホー、みんな。ねー？

他にもこんな奇想天外な奴が居るんだ・・・

「そう、なのか・・・」

「ソウダ、ジコシヨウカイガオクレタナ、ボクノナマエハ『ハウンド・デュエツト』ダ」

へー、見た目すつごく日本人なのにね・・・とかいう空気じゃないので止めといた

「は、ハウンド・・・」

「ハウでいい」

お、なんかカタゴトじゃなくなった

「お、やつとなおった、これすぐ壊れるんだよね・・・」

ヤベー、俺男なのに、なんか魅了されるほどのイケメンボイスだ・・・

「普通に喋るの久しぶりだなー」

そつですか、と言う前に口が動いた

「あの、アレ良いんですか？」

「ああ・・・、あれ？」

うん、なんかすぐ横位に居るんだけど

「伏せた方がいい？」

「お察しの通り」

ドゴオン、爆音とともに「ナニカ」に穴が開いていた

良く見ると、人間みたいだ・・・ただし、真っ黒。通りで良く視認できない訳だ

「いた。いたた!!」

ガレキが飛んできやがった。う？

「アフターイメージ発動!!、コード：二重奏^{デュオ}!!」

ブワーン

という音共に、ハウの身体が・・・身体が。ズレタ

「!!!!!!」

「お前はそこで見てろ」

みてろ、か。無理だろ

ガレキが物凄く飛んできて伏せてたら、逆に危ない気がする

俺は、逃げながら二人（？）の動きを追った

ズガガガ、何処から出したか知らないがいつの間にかハウの両手には見たことない銃（？）をマシンガンみたいに、連射してた。

指が見えない。と思ってるうちに

勝敗はついていた

もちろん、鬼畜のように連射されてその・・・ドッペルゲンガーは
可哀想なほどにぼろぼろだった

「任務完了かな・・・？、うん。任務完了だな。にしても、僕にこ
んな雑魚^{ドロップアウト}任せるなんて・・・どうかしてる」

こ、このひと・・・王子様・・・系。なのか

「あ、あの一」

「なに？」

「えーと、ありがとうございます。助けたんですよね・・・？」

あれだよね、助けられたよねこれ、うん

「違うけど？」

ちがうのー？

「ただ、この任務さーこの学校のドッペル殺せただけだし・・・

べ別に助けたりしたつもりはない」

ツン・・・デレ？

「は、はあ・・・」

「あ、あと記憶消すね？」

唐突過ぎる。この人。あり得ない。

「そらよつと」

ジャキ

目の前に銃

これって日常生活で当たり前の範囲入ってますか？

「まあ、いつぺん死んでくれや」

ズガン

あーゆつくり弾丸がこつちに・・・

思い出が走馬灯・・・

本当にみるんだな走馬灯

あーあ。外崎にゲーム貸したまんまだ、外崎にお金貸したままだー、外崎に詩返してないままだー

激痛とともに

眼の周りに、鮮血の花が咲いた

NO、1 - 3 (後書き)

主人公死亡

王道だね

今日からここは人物紹介コーナー

粒子「はいどうも、この糞小説作者のペンネーム粒子分解です」

誰に話してんだ

ここは基本俺（粒子分解）しかいないんだから

セリフみたいに書いても意味ねえジャンー！！

前振り終了

神薙 緋炉 ㊦ カンナギ ヒイロ

年齢 16 歳 (高二)

今のところネタばれになってしまつので以下略

→ 隠意味ないじゃん！！

NO、2（前書き）

死んだ

NO、2

あれ、ここ天国かな？目の周りが真っ白だ・・・でもないかも

ちょうど真ん中あたりだけ黒い・・・あーこの形何か覚えてる・・・あれだ

アレ、ハウの制服みたいなやつだ

あれ・・・なんか近づいて・・・る？

うん。近づいてんな

つかもう、

パチ

「うわああ!!」

顔近い顔近い!!。何する気だこいつ!!

「何する気だこいつ・・・顔近い顔近い、つとこんなもんか？」

「え？心読めんの？」

王子・・・すげー。？王子？なんで王子？。まいいか

「あ、あとなんで俺生きてるんだ。死んだんじゃないかったのかもう

「つなで解るんだよ」

「え・・・あ・・・うん」

こついうのは、弱い。え？、読まれてるってか・・・ねえ先読みま
でされてるよ

すげーな王子！！。じゃねーよ！！なんで感心してるんだ！！？

「まあ、感心するのも無理はない。なぜならそれは俺がハウだから
！！」

だれか、こいつに馬鹿だときずかせてやって！！

「あ、いまコイツ馬鹿だっと思ってたろ！！思ってたろ！！？」

「あ・・・言葉攻め。止めて？」

無理勝てない、俺この人に勝てる気がしない

「ふははは！！。どうだまいったか！！」

「はいはい、まいりましたよ」

つかそれよりなんで俺生きてんだ？だって、俺こいつに殺されたん、
じゃ。

「は？僕は殺してないし」

「じゃ、なんで？。俺自分の血見たし・・・」

「あははは！！こいつ、おもしろー！！」

ハウはバンバン膝を叩きながら俺を上目づかいで見てる

なんか・・・可愛い・・・くないくない！！

そっぴや、ハウって小さいな・・・

「まさかペイント弾で気絶するとわ（爆」

ぺ、ペイント弾・・・だと

「可愛いじゃないか！！」

こ、こいつ・・・何時か見貸してやる・・・？なんだこのこれから
も身近にいる的な俺の反応・・・

「あ、そつだ。これからお前は僕らの仲間入り」

そっか、そっか・・・

「はい？」

「うん、だから、ここ『Outer』（ドッペルゲンガー撲滅教会）
のエクソシストに成れって言うてんの」

何のことかさっぱり

「『Outer』（こいつ）は、さっきのドッペルゲンガーを倒すた

めの教団、3世界の秩序を守るためにここがある。ちなみに3世界はお前のとこの「主世界」ドッペルゲンガーが住む「裏世界」そしてここ『Outer』」

「な、なんで。なんで俺はここに居る？」

「俺が気に入った」

即答だった。

話を聞くとただ「お前はやれる子に見える」だとのことだ

まあ、確かに俺は、K高校の番長やってるけど・・・せいぜいパンチ一発で鉄製のドアが5ミリへこむぐらいだぞ？

なんでかわ解らないが・・・断れなかった。あとちゃんと学校には行けるらしい（アウターの時間は主世界の100文の1らしい）

「つーことではいこれ」

ポンと俺の両手にあのハウが着てる「制服」（もどき）

「これから初任務を行う、武器はそこらへんにあるから好きな持ってくる」

もうこの異常性に驚くのもメンドクセー

「解った」

そういつて俺は、ハンドガンを二丁、制服の後ろにあるホルダーに

しま
った

NO、2（後書き）

初仕事

NO、212（前書き）

初任務出来るかな♪

NO、212

「あー悪いさっきの銃返してくれ」

「なんで？」

「テストだよテスト」

テスト・・・嫌い

「ちょっと実力が図りたい、この後の任務についていけるか心配だし・・・」

「つーわけでスタート」

この人のごり押し感には着いていけそうにもない

ブウン

と、音共にモザイクの塊が地形を形作った

「え？何やんの？」

「アクション実技のテスト」

はー・・・さっぱり

「今からさっきの雑魚と戦ってみろ。いわゆる、組手^{ドロップアウト}つて奴だ」

「さっきのつて、あの、ハウがぼろ雑巾にした・・・アレ？でもアレって主食・・・人間でしょ？」

「大丈夫。痛みはあるが相手はデータだ」

痛みはあるんだ・・・嫌だな・・・けど、この人絶対「お前に拒否権はない！！」とか言いそうな人だし・・・

「あ、因みに拒否権ないから！！」

つくづく期待を裏切らないねー。全く

ザーとノイズが走り。またモザイクが形を作っていく

ガン、ガガガガガ・・・

ザー

「よし、戦闘開始だ！！」

ふー落ちつけまずは相手の出方を見る喧嘩の時と同じだ

2分経過――

にしても、うごかないな・・・

「あー！！わり。スタートボタン押してなかった（笑）」

天・・・然？

「べ、別に、気づいてなかった訳じゃない!!」

ハウは王子系で・・・ツンデレでなおかつ天然。と

「神薙!!後ろ!!」

後ろを振り向くと一匹のドッペルゲンガーがモノつ凄い勢いで突進してきた

案の定避けられなくて溝にクリーンヒット・・・痛い、痛すぎる

「うぶっ・・・」

あー、イライラしてきた

メンドクセーなあ

「おらよ!!」

俺は体制を立て直して、懐に入り込みーの掌底!!!

ピギャー!!!!

耳イッテー!!!?、んだこいつの叫び声

「あ、わりソイツ能力^{スキル}持ちだった」

へー、もしかして、ハウが使ってた奴みたいな?あのブワーってな

った奴みたいな？

「ここで、ハウンドのドッペルゲンガースキル解説♪」

なんか始まった・・・

「^{ノイズ}雑音効力耳が痛い」

そ、そうですか・・・

「あ、上から来るぞ気をつけろ」

ガッン

言うの。遅いですよ。

もろに頭に喰らってくらくらする・・・

「ああ！！！！メンドクセー！！！！」

俺は右腕を突き出した

ズブ

ドッペルゲンガーがおれの腕に突き刺さった

脆い・・・ぐ！！！！？

「あ、やばい！！神薙、振りほどけ！！」

ぐっぐ・・・

「う？これ・・・データじゃなくて現実^{リアル}転送じゃねえか！ー！おいおい、訓練用のドッペルゲンガー入れんなよ・・・あ、俺か。。。」

原因の詳細・・・以下略

うっ、痛すぎるぞこれ

ーエラーが発生しましたー

緊急警告ー訓練用ドッペルゲンガー〃ノイズ零が――

「ガガガ、ギギガ・・・ガグギイ！！！」

「神薙！！！」

ガガガガガガ

ハウが飛び込んできてノイズをハチの巣にした

「神薙・・・大丈夫か？」

「ああ・・・んなんとかな」

まだ、右腕に激痛が走る

「？・・・なんだこれ・・・」

ハウがキョトンとしていた・・・よく見ると・・・俺の右腕が・・・

どンドン・・・小さな粒になっていく

「俺に聞くなよ・・・」

目線をハチの巣にされたノイズに目を向けると

同じように、小さな粒になって漂い始めた

「ま、まあ・・・テスト終了」

粒子———ナノブレイカー分解

頭の中で何かが叫んだ

「ぐ・・・ぐあ・・・つく」

「だ、大丈夫か神薙!!」

「うあああああ!!!!」

ブウン・・・俺の右腕が裂けた・・・いや、ハウの時みたいにズレている

「ま、まずい!!!アフターイメージが発動してやがる!!!・・・
落ちて着け落ちつけ・・・ああ・・・どうしよう」

俺の右腕が徐々に離れていく・・・

右腕が俺を形作った・・・これがドッペルゲンガーの由来かもな

そいつはハウを掴んだ

「畜生・・・こ、コード!・・・デュオ!・・・!」

言い終わる前にハウがブン投げられた

ズガン

そう思ってるうちに俺の腹に手が突き刺さってたさっきのノイズみたいに

「ぐああああ!・・・!」

激痛、痛さに俺は叫んだ

「な、ナノブレイカー!・・・!」

バアン

最初何が起こったかが解らなかったが

ドッペルゲンガーが消えてなくなっていた

「な、ナノブレイカー?・・・そいつは・・・禁忌(T a b o o)じゃないか!・・・どうして・・・そんな能力を・・・!」

俺が聞きテー

・・・俺はまだ

その時は知りもしなかった。この能力のおかげで

これから散々な目に遭うことを

NO、212（後書き）

やっと主人公の能力が出てきました

うし・・・じゃあここで

紹介のコーナー

ハウンド・デュエット

年齢16歳

ハウンド・デュエットとはコードネームであり本名ではない

本名はのちほどね

ちなみになんで最初カタゴトかと言うと

任務中はアウター側の扱いになるため

通信機を通してでしか話せないのであんなった

能力は：デュオ二重奏

自分の意思のある残像を作りだす

アフターイメージの亜種的存在の能力

だがこちらは基本的に単色

武器

ハンドガン（？）

白と黒の銃

ドクロと十字架のチェーンが付いている

この先はまたまたネタばれになっていくので止めておく

でわ

NO、213（前書き）

まさかの初仕事なしだった前回

NO、213

「う、うう…」

どうやらあの後気絶したらしい

ここは…病院なのかな？

「ん？おお…！！起きたか！！」

「ぬお！！？」

顔近い顔近い！！！！…あ、あれで、デジャブ？

作者！！デジャブグラグはここまですておk（殴

はい、済みませんでした

「ここは病院なのか？」

とりあえず聞いてみた

「まあ、そんなとこだな。厳密に言つと実験室」

実験室・・・おれ、改造（弄られ）たりしてないよな…

「んで、お前の能力をちよつと調べたら…うんなんか変なんだよな…神薙の能力は禁忌種（Forbidden concept）の

ナノブレイカー
粒子分解のはずなんだが・・・今は能力なし（no skill）ど
ういうことだかさっぱりだ・・・全く」

俺が聞きてーよ、ったく

右手を支えに起き上がろうとしたが、まだ痛みで右腕自体が動けな
かった

「あ、まだ動くなよ」

「あ、うん。ところでさ、誰がここまで連れてきたの？」

「へ？俺以外誰だよ？」

「そ、そっかありがとな」

なんだか知らないがハウの頬が赤く染まった

「うん、それじゃもう治癒的鎖（Restraint recovery）で傷は治しておくから今回はもう今日は『主世界』（Main side）に帰れ・・・すまんな勝手に連れてきたり勝手に
組織に組んだり・・・うんなんかごめん」

なんで謝るんだこの人・・・

「いや・・・俺このもう入ったことになってるの？」

「うん」

即答だ

「まあいいやじゃあ目をつぶれ、あ、あとこれ持て。コイツは簡易転換装置（Portable）だ任務が入った時は問答無用で転送する」

「はい」

つーことで俺は帰った

お見送りをしてはくれたがそっけなくて泣けた

「おーおなんか久しぶりに見たような感覚だ・・・そっいや時間の進みが100分の1なんだっけまださ4時前だ・・・つかあっち時計なくて時間解らなかったな・・・」

ふあーとあくびをした

「もう・・・現実で驚けそうにないな」

と独りごとをぶつぶつ言いながら家路を歩く

にしてもなんだったんだろう・・・粒子分解。

「な、ナノブレイカー」

なんとなく言ってみた

・・・やっぱなんもおこらないか、

俺はのどが渴いたので財布から500円を取り出して

自販のココアのボタンをぽちっと押した

はずだった・・・ココアのボタンが・・・ボタンが・・・ジジって・
・ジジって消えってる・・・

「はっは・・・なんだよこれ」

おい、ハウ！！能力・・・有るじゃないか！！！！

ボタンから顔を上げた時には

物凄いいことが起こっていた、自販が、自販が・・・中途半端に消えた

アートにも見えるぞこれ・・・で、でもどうしようこれ・・・困った

ガタン

「うお！！？」

ココアが落ちてきたビビった

ここれ触っても大丈夫だね・・・不安(?)を胸に

触れてみた・・・お、大丈夫っぽい

カシュ、と開けた

ゴクゴク、うん味は平気っぽい。と思ったと同時に

「あつちー!!?」

ココアのカンに俺の手形ができていた

「あはーあはははは」

どうすればいいんだこれ

あ、そうだアイツ解除する時なんて言ってたっけ……うーんと「ジョイカジーマイタファ」だったっけ?

「ジョ、ジョイカジーマイタファ」

いつてみた

しかし何も起こらない……

て、てすとしてみよう

俺はそこらの小石を取って握ってみた

お、消えない

「よ、よかった……」

家に帰ってきた

NO、213 (後書き)

お帰り

はいショウカイコーナー

どんどんぱふぱふ

外崎 恭介
とけい けいすけ

高二

変人

以上

NO、214 (前書き)

ねむねむアフターいねぶんあわー

NO、214

う．．．．ん、ここ何処？

あ、そつか。ここ俺ん家か．．．なんか懐かしく思えるの気のせいだな．．．．．うん

ジリリリリリ

「うわ！！！」

俺は急に成りだした目覚まし時計にびっくりした

．．．．．むしろ飛び上がっていた。誰かが居たら恥ずかしくて泣くところだった

まあ、騒いだところで誰も反応する訳もない。だって一人暮らしだもん

俺はバタバタと飛び上がった拍子でぶちまけた布団を「よっこらせ」とどっかのじいさんみたいにかっこ悪く持ち上げて、ベランダのカーテンを開けた。

「いやー眩しいものだね太陽さんよう」

眩しすぎる、太陽さん今日もお元気ですね！！

全く、うっかしい位に

もう7時半だったのではっばと支度をした(ということは目覚めしは5回なったと言うことになる。お、恐ろしい

んでK高校に登校

「かゝんゝなゝぎ!!!」

むにゆう

と俺の背中にナニカやわらかい物を感じた

あ、アイツか

ガン、ガン

俺は振り向きざまに掌底ををほぼ同時に優しくたたきこんでやった

「おぶふう」

と、気持ちい反応をしたのは「幼馴染2号」の『蒼井あおい 紗奈さな』だ

蒼井 紗奈〓幼馴染2号、あだ名〓サイ、見た目〓ショートの元気っ子

コイツはお決まり過ぎてもう動じなくなった………そんな、俺はおかしいのか………

世の男子諸君どうだ私が羨ましいか?ふははは羨ましいだろ!!!
跪k(蹴りの嵐

はい……調子こきあした、サーセン

だだだだだだだだだだだだだだだだ

「あ、きた」

どーんと、飛び込んだのはそう、外崎

「おっはよー、神薙！！！！紗奈！！！！」

うるさいうるさい

「ねねー昨日のあれみたー？」

「ああ、見た見た！！！！あれでしょー」

と、外崎と紗奈がおしゃべりをし始めた

うるせーとか思いつつもこれが俺の登校の仕方

なんて、考えてるうちに校門の前に着いた

「おはよーございますです！！」

はい、もう言わなくても語尾で解るよね、うん。そう山田だ

はいはいとテキトーにあしらって、玄関をを歩きかう生徒共を縫っ

ていき校内へとずかずか入っていく

俺は階段をゆーっくり昇っていく……足を滑らせた

「ぬわあああ……！」

メンドクセー、誰だよここ濡れたままにしたの

NO、214(後書き)

学校

NO、2・5（前書き）

転んだ

NO、2 - 5

あいたたた

誰だよ……まったく

「ここ濡れたままにしたのは……!!?」

叫んだ、お察しの通り僕ではない

外崎だ

横を見ると戸崎も一緒にスツ転んだようだ、外崎は足を片方抱えたまま上目遣いで階段を睨み付けてる
すっかりそれにビビッタ俺は何も言わずにキョトンとしていた

「ははははは」

後ろからム力つけるほど甲高くて大きな笑い声がした…紗奈だ

「何笑ってんだよー、おめーさー!!」

少しばかりキレかった外崎が怒鳴る

「だって面白いんだもん（笑）」

と紗奈は階段の手すり、俺らが見える側を指す

『滑ります注意!!!』

と、ばかげた紙が張ってあった

「ちゃんとまえみようねー」

そっいいながら、紗奈がズカズカと階段を上って…滑った

「はははー（笑）」

おめえもじゃねえかよ――

朝っぱらからの保健室

三人仲良くそろって頭を冷やしていた

「いたたたー」

三人同時につぶやく、そのハモリに笑う

三人同時に足を組んで、三人同時に見つめてあって、ほほを赤くしてまた笑う

「あーあ、こういう日もいいもんだね（笑）」

また、同時に言って笑う

メンドクセー授業が全部終わって、ダダダダッと、たくさんの生徒たちが駆け下りていく。「なー今日ムックいかねー?」「あーいいねえ——」「今日のあれ見る?」「もち、むるにきまつてんじゃない」などと今日帰ってから何をやるかを話し合っている、浮かれている。まあ夏休みになるんだから仕方がないか。うん。そう、明日から夏休み。もちろんそんな浮かれたことをいつているのは一年共のみ

自分の通知表が恐ろしくて開けない、二年、三年は黙りこくっている

「神薙ー!」

駆け寄ってくるのは彼女の……じゃなくて、委員長の「伊瀬 優夜（いせ ゆうよ）」伊瀬さん、今日もお美しい!、ほんと抱きてー（じょうだんすよ）うん、じつは彼女

「何?」

と無愛想に、そっけなくメンドくさく返す俺に

「もう、ホント無愛想ね……」

いつもならここで、「まじか……」的なことを言える俺のはずだがそれどころじゃない。

「わりい、今日は構う暇がない」

実は授業中、簡易転送装置ポータルに連絡が入っていた

「無理やり転送は流石にまずいと思ったから感謝しろよな！！けど、18時までには支度してないと強制転送ね」？」

と、可愛く書いてあった

やばい・・・あと15秒

焦りに焦りまくる、冷や汗がとまらない・・・。どくどくと胸の高鳴りが別の意味で高まる。そりゃそうでしょ？だって転送装置でしょ？いきなりピュン！！って消えたらドウスンねん！！

「とりあえず、といれトイレ！！」

俺は個室便所のドアを開けて・・・むしろ飛びこみながらドアを閉めた。

ジジジジジジ

「わわ・・・わ」

消える？これ消える？

始めて向こう言った時は気絶してたからな

ポコン、と可愛い音共に視界が・・・視界がずれた

NO、2 - 5 (後書き)

無理やり転送

今回も人物紹介

蒼井 あおい 紗奈 さな

身長152

性別女子

元気っ子

けど、運動音痴

以上

なんかこの先巻き込まれるような予感はあるよ

NO. 2 - 6 (前巻)

うくくく

NO、2 - 6

「あわわわ!!」

としているうちにどんどん視界はどんどんズレていく。

と言うよりは空間が割れている？

ぽこぽここれまた可愛い音を立てながら、寧ろなぜそんな効果音が聞こえてくるのが不思議に思えるほど空間は荒々しくひび割れる

「――なぎ――神――か――神薙!!」

ふと、顔を少し上げた瞬間、にゅうとハウの顔が出てきた。これ、夜中にやられたら・・・弱い人は失神できるな。若干ホラーだ

「こっち来い!!」

有無を言わずににゅうと腕を伸ばして俺を引っ張った、と言うよりはブン投げられた

ガン!!

「いってー」

俺は床に頭をゴツンこした

痛みが這う後頭部を抑えながら少しばかりキツとした目でにらんでやる

「あ、悪い悪い・・・ちょっと時間が、ね、足りないから」

そうですか、と何故かおれは納得する。こいつには何故か振り回されてもいいような気になる…どうして？・・・はっ！もしかして俺は受なのか？受けなのかー！？・・・最近面倒事から逃れられてないような気がする・・・それはハウと会う一週間前の話だ。

「あー退屈」

俺はぶつぶつ言いながら、いつもの馬鹿二人ごんきとせつなと肩を並べて学校に登校する。朝の無駄なHRを外崎と話をしながら終わらせ授業に出た。優夜に頼みごとをされた何時もならここで断ることをする俺だが（頼み事は別であり、放課後のことはよく聞いてやる）ああ、いいよの二つ返事で返事を返していた。しかもいたって普通に…どうしたんだろ。俺はこんなM犬だったのか？——考えるのはもう止そう。

…俺はM犬…M犬…何この自己暗示…。

…それからなぜかしら頼みごとを断れない日々が続き、今に至る。

それはさておき、とにかく急いで着換ええろと、またブン投げられた…いてえよ。

『——ハウンド・デュエット、早くしてください』

「急かすな、うつせーな！……」

ジャキ、ガガガガと、とても片手で撃つたとは思えない程の連射で、大層豪華にできた、モニターを、ごみくずに変えた…。

「おい、さっさと来い」

「もう着替えた」

なぜかしら俺は着替えが済んでいた。…なんで？、もうコイツ（ハ
ウ）自体があり得ないから、驚くことは止めた

NO、2 - 6 (後書き)

頭痛い、気持ち悪い死にたい

NO、3 (前書き)

とくにない

NO、3

随分と長い廊下だ。さつさと来い来い言つてた割には、歩幅、スピードともに急いでいるようには全く見えない。ソレに耐えかねた僕はハウに尋ねる。

「な、なあはう…まだつかないのか？」

「はあ…どうでもいいだろ、ただ黙つてついてこい。」

…理不尽だ。コイツは…なんでこう…勝手なんだ？勝手を通り越して我が道を突き進んでるよこりや…。

「…。」

まあ、しょうがない。急かしても、俺はついていくしかできない。だつて、俺はこの場所を知らないんだから（笑）

目の前に大きな扉らしきものが現われた。扉の上には、大き汚ねえ字でこう書かれていた

『かいぎしつ』

しかも、うん。ひらがなだ。

「神薙…ついた。ちよつと開けるから後ろに下がれ」

「あ、ああ」

俺は後ろに両手感覚ぐらいの距離を置いた。そしてハウは銃を取り出した…もう何をしようとしているかは軽く想像がついた。

ジャキ、ガガガガガ！！！

ほら、やっぱり撃つた。

「おい！さつさと開ける！！、今俺はすつごく気分が悪いんだ！！蜂の巣どころか、この施設ごと大破させてやるつか！？ああ！？」

『——— ちょ、ハウ止めて！悪かったさつきは悪かったから！てかドアは緊急意外開けてるつて言つてるでしょ！！？—————』

「あ、そつか…そうだった。」

馬鹿だコイツ。イライラするとモノに当たる、と、メモだメモ。

自分がしくった時には偉い怖い…あと、前を歩くのは極力控えよう…流れ弾が何時当たるか分からない。怖いよ…この人。

「ふー、すつきりした。」

「—ええ—」

「……。」

すつきりしたって…どういう意味だよ…。やっぱりイライラをぶつけただけなのか…。

「おい、カイおれのイライラは治まったことにするけど、謝るときは直接な、ち、よ、く、せ、つ。」

ハウはそういうとニツコリ笑った。物凄く殺気立っている。怖いよ…この人…。

ハウは扉の隣にスイッチをおす。そのスイッチには「たたくんじやねえよ」の文字が。…悪い予感がしてならない。

「ぬんらあ…!!!」

予想通り、ハウはスイッチを人差指で思いっきり突いた。

ガシヨン…ヌイーン……ガチャガチャ…シュウン。

明らかに、おかしい開き方をしたがあえて突っ込むことをしなかった。だって、怖いんだもん…この人。

『——ハウ!!!!!!叩いちゃだめだって言ってるでしょ!!!!??』

「俺は…叩いてない（キリッ）」

ああ、もう駄目だこの人…我が道を行くって程度じゃないな…もう、「ココは俺の世界だ!」的な感じの乗りだよこの人…。

ハウと神薙がワアワア（主に、ハウがだけど）やっているとき、

外崎は学校のトイレで神薙を探していた。

「なあ、神薙…?無視すんなよ…あ、もしかして大の方か?なあなあ、別に無視しなくてもいいじゃんかよ…なあ神薙…もう無視し

てっから開けちゃうかな！……！！！！？」

（あれ…神薙がない…。何これ？目の前が歪んでる？すごいな、空間に亀裂だ。夢？うし、頬つねってみつか。………あれ？痛いなあ？…も、もしかして…は、入れるんじゃない？どっかのポータル的な…感じで…。）

外崎は、空間の亀裂に手を伸ばした。

「あれ？これすこまれるんじゃない——」

悪い予感はあるもの。外崎はあっけなく吸い込まれていった。

——ポコン

NO、3(後書き)

ありゃりゃ
(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0846k/>

Afterimage

2010年10月8日23時03分発行